

第2次豊田市文化芸術振興計画【改訂版】 計画の進捗管理（2023年度実績報告）

■施策I <みる・ふれる> 多様な鑑賞・体験機会の拡充 【主な取組 12 事業】

（1）気軽に文化芸術に出会う機会の拡充

文化施設での気軽に参加できる公演や展覧会のほか、学校や地域等へのアウトリーチ活動などを積極的に展開し、様々な市民が身近に文化芸術に触れる機会を提供する。

NO.	主な取組 内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	指標1 (成果を数値で測る指標)				指標2 (成果の評価に用いることができる状態等)	所管課
				実績 ※太字は目指す方向のとおりに推移を示す					
				2022年度	2023年度	2024年度	2025年度		
1	クラシック音楽普及啓発事業 (か〜るくクラシック、親子対象 コンサート等)	鑑賞者数 5,216人 (2019年度)	↑	6,082人	7,282人			子ども招待事業を開始し、初めて訪れる市民（応募者の約5割）を増やすことができた。若年層をはじめとした新たな客層の取り込みを目指し、ゲーム音楽等を盛り込んだ吹奏楽公演を開催したところ、アンケート回答者の約98%が公演内容に満足と回答した。	文化振興課 (財団共催)
2	能楽普及啓発事業(わくわく能 楽体験、小中学生のための能狂 言鑑賞会等)	鑑賞者数 955人 (2019年度)	↑	916人	1,814人			子ども招待事業を開始し、初めて訪れる市民（応募者の約9割）を増やすことができた。新たな層の獲得に向け、図書館と能楽堂のバックヤードツアーを連携して実施し、お互いの施設を知ってもらえる相互作用となった。	文化振興課 (財団共催)
3	クラシック音楽・能楽地域活性 化事業(学校等へのアウトリー チ活動)	鑑賞者数 1,379人 (2019年度)	↑	1,056人	1,731人			学校へのアウトリーチでは、ピンポン玉を使用してピアノ弦の張力を可視化する演出や、能面の着用体験など、プロのアーティストや能楽師による工夫を凝らした実演を目の当たりにして、児童・生徒が驚きと感動を受けていた。	文化振興課 (財団共催)
4	クラシック音楽・能楽地域活性 化事業(出前コンサート、ロビ ーコンサート)	鑑賞者数 2,026人 (2019年度)	↑	1,398人	2,272人			まちなかの商業施設でロビーコンサートを初めて開催し、通りがかりの店舗利用者が足を止め聴き入るなど、気軽に音楽を聴く機会を提供できた。毎回立ち見ができるほど人気であり、アンケートの回答者の約94%が公演内容に満足と回答した。	文化振興課 (財団共催)
5	おいでんアート体験フェア	参加者数 6,200人 (2017年度)	↑	2,065人	3,000人			文化芸術に直接触れる機会としてだけでなく、文化団体(出展者)と参加者が交流できる良い機会となった。このイベントをきっかけに、文化団体(和太鼓)への入会希望者も生まれた。	文化振興課 (財団共催)

【総括】

鑑賞者・参加者数を見ると、コロナ明けとともに、目指す方向に戻ってきている。おいでんアート体験フェアについては、2017年度から会場が変更になっているため参加者数は減少しているが、2022年度に同会場で実施した事業に比べ参加者数は増加している。学校や地域へのアウトリーチでは、毎年異なる学校や施設を約30か所訪問しており、満足度も常に高く得られている。また、2023年度から複数の公演において、子ども招待事業を開始し、子どもの鑑賞機会の拡充を推進している。子育て世代へのアプローチとして、0歳からの未就学児向けコンサートを新たに立ち上げた。

その他の計画掲載事業の中学3年生(全校)を対象とした「心に残る記念事業」と、小学6年生(希望校)を対象とした「こころの劇場」では、約5,000人の児童・生徒が鑑賞した。教員からは、同世代と一緒に鑑賞すること自体が貴重な体験であることや、文化芸術や施設等を知るきっかけになったという意見が多く寄せられた。

これらのことから、「(1)気軽に文化芸術に出会う機会の拡充」は計画どおり推進できている状況である。今後は、普及啓発事業を交流館等の地域施設で実施することで、より一層身近で文化芸術に出会う機会を拡充していくことが必要と考える。

（2）幅広い分野の文化芸術に親しむ機会の拡充

美術館、コンサートホール・能楽堂、市民文化会館等の文化施設において美術、音楽、舞台芸術など様々な分野の公演や展覧会等を開催することで、古典芸能から現代の新たな表現まで、幅広い文化芸術の鑑賞・体験機会を提供する。

NO.	主な取組 内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	指標1 (成果を数値で測る指標)				指標2 (成果の評価に用いることができる状態等)	所管課
				実績 ※太字は目指す方向のとおりに推移を示す					
				2022年度	2023年度	2024年度	2025年度		
6	クラシック音楽鑑賞事業	鑑賞者数 10,373人 (2019年度)	→	6,614人	12,399人			子ども招待事業を開始し、初めて訪れる市民（応募者の約6割）を増やすことができた。パイプオルガン設置20周年を迎えた記念公演では、コンサートホールでオルガンと能楽師とのコラボレーション公演を行うことで、本市ならではの魅力を発信できた。	文化振興課 (財団共催)
7	能楽鑑賞事業	鑑賞者数 3,357人 (2019年度)	→	1,894人	2,359人			子ども招待事業を開始し、初めて訪れる市民（応募者の約6割）を増やすことができた。様々な構成や流派で公演を組むことにより、市外・県外からも多くの鑑賞者(約6割)を呼び込むことができた。	文化振興課 (財団共催)
8	美術館展覧会開催事業	観覧者数 261,615人 (~2020年度まで 直近4年度平均)	→	205,676人	203,046人			親しみやすいものから、独創性のあるものまでバランス良く展覧会を開催した(10回)。展覧会毎のアンケートから満足度は高く、初めて来館する方が一定数(約4割)いた。	美術館

主な取組		指標1（成果を数値で測る指標）				指標2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課	
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりの推移を示す					実績
				2022年度	2023年度	2024年度	2025年度		
9	美術館での教育普及事業（アーティストトーク・講演会等の開催）	参加者数 1,149人 (2019年度)	→	1,995人	1,190人			展覧会の関連イベントの講座は、出品作家から直接話しを聞くことができる貴重な機会を提供できた。また、コロナ禍から開始した講演会等のアーカイブ配信により、直接来館できない方に対しても普及活動ができた。	美術館
10	美術館での教育普及事業（作品ガイドボランティアによるギャラリートour）	参加者数 2,570人 (2019年度)	↑	1,981人	3,028人			対話型鑑賞でのギャラリートourは、参加者からは作品の理解が深められていることがうかがえる意見が多数寄せられた。	美術館
11	民芸館展覧会の開催	観覧者数 13,188人 (2019年度)	↑	14,464人	17,432人			訴求力のある特別展が開催でき、大手メディア等での効果的なPRを行った結果、新規来館者が4割を超えた。特別展の満足度も高く、民芸の普及、魅力の発信が効果的にできた。	民芸館

【総括】

鑑賞公演や展覧会等は、コロナ禍においても継続してきた。コロナが明け、鑑賞者数・参加者数は、目指す方向に戻ってきている。ただし能楽鑑賞事業については、コロナ禍の外出控えにより離れてしまった鑑賞者が戻ってきていない状況が続いており、新たな層の獲得に向けた取組を行うことが大切である。美術館では、満足度の高い展覧会が実施できたことに加え、展覧会に合わせたアーティストトークやギャラリートour、コロナ禍から生まれたアーカイブ配信など順調に取組を推進できている。民芸館においても、大幅に観覧者数を伸ばした。

その他の計画掲載事業では、「和紙のふるさと事業」において、多様な紙文化や和紙アートを紹介する展覧会と、豊田小原和紙文化を継承するための展覧会を開催し、約4,000人（対前年度比2割増）に豊田市で生まれた和紙芸術を伝えることができた。

これらのことから、「（2）幅広い分野の文化芸術に親しむ機会の拡充」は、概ね計画どおり推進できている状況である。今後は、取組は継続しつつ、時代に合わせた様々な情報提供方法を検討し、より多くの市民に情報が伝わるよう工夫をしていく必要がある。

（3）公共的空間等の活用による文化芸術の浸透

公共的空間や商業施設等での作品展示や舞台公演などの機会を増やし、日常の場での文化芸術の浸透を図る。また、新たな文化イベントの誘致・開催を推進し、市民が現代の文化芸術表現に接する場を増やす。

主な取組		指標1（成果を数値で測る指標）				指標2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課	
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりの推移を示す					実績
				2022年度	2023年度	2024年度	2025年度		
12	とよた市民アートプロジェクト（まちなか芸術祭の開催）	①来場者数2,685人 ②会場数8か所 (2020年度)	↑	①4,483人 ②10か所	①1,072人 ②4か所			アートを通じたまちなか周遊を目的にスタンプラリーを実施した中で、趣旨に共感した店舗（コーヒー店、画廊等）やイベント実施者など、新たな連携者を増やすことができた。	文化振興課 (財団共催)

【総括】

来場者数や会場数については、実施体制の見直しにより、規模（日数・会場）を縮小して開催したため、いずれも指標を下回った。一方で、まちなか芸術祭の会期中にまちなかの店舗でのアート展示や、まちなか広場でのアートイベントが民間主導で開催されるなど、市民の主体的な取組を促進させることで、市民が文化芸術に触れる機会を多く提供できたことは成果と言える。

その他の計画掲載事業の「緑陰ギャラリーの展示活用」では、まちなか芸術祭の期間中に地元中学生がアーティストと一緒に段ボール作品を創り、展示した。また、美術館の企画展と連携した展示も行うなど、学生や若手アーティストの発表機会を創出するとともに、まちを歩く人々にも芸術鑑賞機会を提供することができた。

これらのことから、「（3）公共的空間等の活用による文化芸術の浸透」も、概ね計画どおり推進できていると考える。ただし、実施期間が限られているため、日常の場での発表機会や展示機会を今後は増やし、より多くの市民が現代の文化芸術表現に触れられる場を創出していく必要がある。

■施策Ⅱ <つくる・つたえる> 活発な創作活動の推進 【主な取組 10 事業】

(1) 市民の創作・発表機会の充実

市民が気軽に創作活動に親しむ機会をつくとともに、公募展や参加型公演等を開催し、日頃の活動成果を発表できる場を提供する。

主な取組		指標1 (成果を数値で測る指標)				指標2 (成果の評価に用いることができる状態等)		所管課	
NO.	内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおり推移を示す					実績
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度		
13	豊田市民美術展の開催	応募者数 388 人 (2019 年度)	→	420 人	383 人			新たな関連企画として開催した市長賞受賞者展では、前年の受賞者のステップアップの場を設け、創作活動を支援した。子どもたちが壁や床いっぱいにクレヨンで描けるワークショップでは、新たな層の来場者を掘り起こすことができた。	文化振興課
14	高齢者作品展の開催	応募者数 405 人 (2019 年度)	↑	277 人	245 人			気に入った作品に対し来場者がコメントをする「作品いいね!カード」の仕組みは、出展者の創作意欲の向上に繋がっている。デイサービスからは「みんなで一緒につくること、展示の場があることで、交流にもつながっている」との意見もあった。	市民活躍支援課
15	障がい者作品展の開催	応募者数 704 人 (2019 年度)	→	694 人	904 人			応募者の3割が新規応募であり、応募者の4割が今後は市民美術展に応募したいと回答しており、創作意欲の向上が伺える。	障がい福祉課

【総括】

応募者数は、豊田市民美術展については目指す方向どおり、障がい者作品展については上回る推移となっているが、高齢者作品展については大幅に下回ってきている。要因としては、コロナ禍で複数の高齢者クラブが廃止され、対象者への情報周知が上手くいっていないことが考えられるため、周知方法を見直す必要がある。どの作品展も応募すること自体が生きがいになっているという声がある一定数あることから、安定的かつ効果的な事業実施を検討していく必要がある。

その他の計画掲載事業では特に、「クラシック音楽市民参加事業（市民クラシックコンサート）」の出演者が年々増加（52組/2023年度）しており、このコンサート自体を活動の目標としている団体も多く、生涯活躍の場としての役割も果たしていると言える。

これらのことから、「(1) 市民の創作・発表機会の充実」は、一部課題はあるものの、概ね計画どおり推進できている状況である。引き続き活動成果を発表できる場を提供するとともに、そのような場の存在自体を広く市民に知らせていく必要がある。

(2) 若手芸術家の発表機会の充実

地元の若手芸術家が活動成果を発表する場として、若手演奏家による公演の開催や、舞台芸術人材の育成などを充実し、次世代を担う活動者の支援や育成を図る。

主な取組		指標1 (成果を数値で測る指標)				指標2 (成果の評価に用いることができる状態等)		所管課	
NO.	内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおり推移を示す					実績
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度		
16	少年少女合唱団の運営	団員数 126 人 (2020 年度)	→	98 人	97 人			東京国際コンクール（2部門で金賞1位）のほか、多くの市内イベントに出演（16回）し活躍した。卒団後も活動や運営をサポートする団友会にこれまでに263人登録しており、定期演奏会への出演や、パンフレットの作成など活動を支援している。	文化振興課 (財団運営)
17	ジュニアオーケストラの運営	団員数（うち市内） 55 人（19 人） (2020 年度)	↑	45 人 (14 人)	54 人 (12 人)			これまで250名以上の団員を輩出し、およそ50名以上が名古屋フィルハーモニー交響楽団など国内プロオーケストラの一員やプロのフリーランス奏者になったりと、第一線の場で活躍している。	文化振興課 (財団運営)
18	ジュニアマーチングバンドの運営	団員数 87 人 (2020 年度)	↑	84 人	85 人			姉妹都市ダービーシャーへの派遣事業のほか、多くの市内イベントに出演（11回）し活躍した。上級生が下級生に教えるサイクルができており、小学4年生と22歳が同チームで全国大会に出場できるレベルにあることは、全国的に極めて稀である。	文化振興課 (財団運営)
19	舞台芸術人材育成活用・創造事業（とよたこども創造劇場）	参加者数 45 人 (2019 年度)	→	21 人	27 人			これまでに修了生の約3割が、次のステップとして「とよた演劇ファクトリー」に参加している。修了生の約1割が役者や「とよたこども創造劇場」のサポートスタッフなど、演劇人材として活躍している。	文化振興課 (財団共催)
20	舞台芸術人材育成活用・創造事業（とよた演劇ファクトリー）	参加者数 32 人 (2019 年度)	→	18 人	22 人			これまでに修了生の約1割が「とよたこども創造劇場」や「とよた演劇ファクトリー」のスタッフや、自身で立ち上げた劇団で、演劇人材として活躍している。	文化振興課 (財団共催)
21	民芸の森活用事業	出展者数 3 組 (2019 年度)	↑	2 組	3 組			芸術家の作品を民芸の森の屋内外に展示する「森のアート展」を開催し、3組のうち2組は公募による出展であった。展示だけでなく、アーティストトークやワークショップも開催し、作家自身のスキルアップの機会となった。	民芸館

【総括】

団員数、参加者数ともに、目指す方向のとおり推移していない。社会の変化など様々な要因が考えられるが、一方でジュニアマーチングバンドでは、2024年度には団員数が大幅に増えている（107人）。未来の文化芸術人材を増やしていくためには、好事例から学び、より一層努力や工夫をしていく必要がある。また、音楽3団体や演劇事業に関しては、活動自体が子どもたちの居場所となっており、技術的なスキルアップだけでなく、社会性を育める場や人として成長できる場となっている。

その他の計画掲載事業の「クラシック音楽市民参加事業（とよたフレッシュコンサート）」では、2023年度は7名（市内3名）が出演。音楽を学んだ若手アーティストの演奏の場の一つとして定着しており、出演を機にアウトリーチ事業や、ロビーコンサートへの出演に繋がるようになってきている。

これらのことから、「（2）若手芸術家の発表機会の充実」は、豊田市の文化芸術の未来のために努力や工夫が必要であり、さらには、時代やニーズに合わせて活動自体を変化させていくことも検討が必要であるとする。

（3）文化活動団体間の交流と連携の促進

様々な分野の文化活動団体が連携して、文化事業を企画・実施することで、新たな発見や他分野への理解が促進され活動の質が向上する機会をつくる。

主な取組		指標1（成果を数値で測る指標）				指標2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課	
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおり推移を示す					実績
				2022年度	2023年度	2024年度	2025年度		
22	おいでんアート体験フェア 【再掲】	出展者数 ※基準に適した 数値が無い ため設定なし	↑	30 団体	34 団体			普段接点がない団体との交流や、相互に活動を知るきっかけとなった。また、出展を機に自団体の展覧会でもワークショップを開催するようになった。	文化振興課 （財団共催）

【総括】

出展者数については、コロナが明け、目指す方向のとおり増えてきている。その他の成果としては、このイベントでワークショップの実施を経験したことにより、各団体の展覧会等でもワークショップを開催するなど、活動の幅が広がっていることが挙げられる。ただし、出展者数が文化団体総数の約2割にとどまっており、より多くの参加や交流ができるような工夫が必要である。

その他の計画掲載事業の「市民アート展（旧市民ギャラリー展）」においても、出展者数は増加しており、イベントの開催を通して団体間の交流を促進することができた。

これらのことから、「（3）文化活動団体間の交流と連携の促進」は、計画通りに推進できていると言える。ただし、交流や連携の規模はまだ大きくなく、今後促進していく必要があるとする。

■施策Ⅲ <むすぶ・つなげる>活動する人々の連携とまちの活性化への展開 【主な取組 8 事業】

(1) 創造的な活動を推進する市民主体の体制づくり

作家の制作をサポートし、また自ら芸術活動を行う市民主体の創造的な体制と活動の場づくりを進める。また、文化芸術に関する市民活動をまとめる制作側の市民を育成し、将来の地域文化の推進者となるための仕組みをつくる。

主な取組		指標 1 (成果を数値で測る指標)				指標 2 (成果の評価に用いることができる状態等)		所管課	
NO.	内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおり推移を示す					実績
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度		
23	とよた市民アートプロジェクト 【再掲】	メンバー累計 201 人 (2020 年度)	↑	201 人	221 人			主要メンバーから市民団体「とよた市民アートパーティー」が生まれ、市民アートプロジェクトの運営に関わっているほか、独自のアートイベントの企画・実施をはじめた。	文化振興課 (財団共催)
24	とよたデカスプロジェクト	応募数 27 件 (2019 年度)	→	26 件	15 件			稲武地区をフィールドとしたプロジェクトでは、実施後も地域との関わりが続いている。2024 年度に採択されたプロジェクトの協力者として、地域と企画者を繋ぐ役割を担った。	文化振興課 (財団共催)

【総括】

数値については、「とよた市民アートプロジェクト」ではコロナ禍で途絶えていた交流企画ができるようになり、メンバー数は目指す方向のとおり増加した。しかし、「とよたデカスプロジェクト」については、2022 年度と比べて大幅に下回った。応募者数の減少については、他市の助成事業の立ち上げ等が要因の一つと考えられる。その他の成果としては、「とよた市民アートプロジェクト」ではメンバーから新たな活動団体が生まれたり、「とよたデカスプロジェクト」では、2023 年度に 10 年目を迎えたため記念イベントを開催し、歴代採択者同士の交流会により、つながりができた。

その他の計画掲載事業の「民芸館・民芸の森の運営を担う人事育成事業」では、過去の民芸館講座受講生が新たな講座講師として活躍するなど好事例も生まれている。

これらのことから、「(1) 創造的な活動を推進する市民主体の体制づくり」は一部、計画どおりに進んでいないものがあり、特に「とよたデカスプロジェクト」においては、2024 年度も応募者数が計画を下回っている (15 件) ため、施策の推進に向け、社会の変化を捉えて見直しを検討していく必要がある。

(2) 文化芸術による地域資源の再発見と発信

市内の様々な地域の魅力を市民が文化芸術を通して再発見し、発信していく事業を推進することで、市民の創造性・企画力・地域への新たな視点を養い、まちへの愛着と活性化に寄与する。

主な取組		指標 1 (成果を数値で測る指標)				指標 2 (成果の評価に用いることができる状態等)		所管課	
NO.	内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおり推移を示す					実績
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度		
24	とよたデカスプロジェクト	鑑賞・体験者数 5,467 人/10 企画 (2019 年度)	↑	10,690 人 /12 企画	2,963 人 /7 企画			旧小原村・古民家演劇企画では、ワークショップ形式で地域に住む人にインタビューを行い演劇の台本に取り入れた。空き家の活用という地域課題に取り組んだほか、本番にも地域の人を訪れるなど、地域でプロジェクトを継続的に実施する地盤を築いた。	文化振興課 (財団共催)
25	農村舞台アートプロジェクト	鑑賞者数 2,480 人 (2019 年度)	→	244 人 (ライブ)	1,064 人 (展示)			会場地区の代表者にも審査に加わってもらったり、地域の人たちが自主的に来場者の案内をしてくれたりと、アートプロジェクトを通して、地域との結びつきが強まった。	文化振興財団
26	小原和紙の後継者育成事業	育成事業の修了者数 累計 11 人 (2020 年度)	↑	累計 12 人	累計 13 人			豊田市民美術展、全国和紙画展(岐阜県)などの公募展で入賞したほか、グループ展や個展を開催し作家活動を継続した。(2023 年度育成対象者 2 人、修了者 5 人)	小原支所

【総括】

鑑賞・体験者数については、目指す方向のとおり推移していない。しかしながら、「とよたデカスプロジェクト」については、コロナ明けにリアルな鑑賞・体験機会が持てるようになり、数としては減っているが、市民や地域の人と深く関わりながら企画を進めることができた。また、「農村舞台アートプロジェクト」は、地域の農村舞台を展示等に利用し市内外から多くの来場者が訪れることで、地域住民がその価値を再発見する機会となっている。一方で「農村舞台アートプロジェクト」の事業自体を縮小していることから、まずは存続(豊田市の魅力である農村舞台の活用)について検討が必要となっている。

その他の計画掲載事業の「稲武地区養蚕・製糸文化伝承事業」では、有名シェフとのコラボ企画を実施したことで、地区内事業者の関心が高まり新たにシルクフードの開発を行うことになったり、そのほか様々な企画を通して地域住民に事業が認知されることで、高齢化していた活動団体に新たに 3 名の新規会員が入り、活動の維持につながった。

これらのことから、「(2) 文化芸術による地域資源の再発見と発信」は数値においては計画どおり進んでいないが、数値以外の部分では、計画で目指す姿を実現する事例も出ている。今後は、そのような事例をさらに増やしていくため、より多くの人に見てもらい、関わってもらい事業展開が必要である。

(3) 文化芸術と様々な関係分野との有機的な連携

学校等へのアーティストの派遣や市民参加型公演などを通して、教育・福祉の現場と連携した取組を行う。また、民間や地域など、多様な主体と連携することで、社会の中で幅広く文化芸術の力を生かす。

主な取組		指標1 (成果を数値で測る指標)				指標2 (成果の評価に用いることができる状態等)		所管課	
NO.	内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおり推移を示す					実績
				2022年度	2023年度	2024年度	2025年度		
27	学校への文化活動者派遣事業	鑑賞・体験した児童数 4,747人/65校 (2019年度)	↑	1,422人 /22校	3,231人 /28校			アンケートでは、97%の教員が「効果があった」と回答した。授業で演劇、音楽等を専門家から学ぶことで、子どもたちが文化芸術に興味を持つきっかけとなった。また、文化団体の活躍の場にもなっている。	文化振興課 (財団共催)
28	クラシック音楽・能楽地域活性化事業(アウトリーチ活動) 【再掲】	①学校の会場数6か所 ②福祉施設の会場数4か所 (2019年度)	→	① 11 か所 ②0か所	① 10 か所 ②0か所			定員に対して2倍以上の学校から応募があった。年々、学校からの申込みが増加している。また、子どもたちが音楽を体感できるプログラムをアーティストが考案し、学校とブラッシュアップしながら開催した回では、アーティスト自身の成長にも繋がった。	文化振興課 (財団共催)
29	クラシック音楽・能楽地域活性化事業(出前コンサート) 【再掲】	福祉施設の会場数 5か所 (2019年度)	→	3か所	6 か所			定員に対して3倍以上の施設から応募があった。出前コンサートをきっかけに、継続的にアーティスト紹介を望む施設もあり、コンサートホール登録アーティスト制度を知ってもらうきっかけにもなった。	文化振興課 (財団共催)
30	美術館庭園活用事業	来場者数 10,504人 (2019年度)	↑	5,928人	5,223人			美術館への来館促進及び中心市街地の賑わいを創出するために実施している「お庭でマルシェ」は、デザインや品質にこだわりのある出店者を集めて開催することで、「美術館クオリティ」を支持するファンを、市外・県外から誘客した。	美術館

【総括】

コロナが明け、クラシック・能楽のアウトリーチ活動、出前コンサートは訪問数がコロナ前まで戻り、文化活動者派遣事業についても、下回ってはいるものの徐々に増えてきている状況である。その他の成果として、アーティストと学校が一緒にアウトリーチプログラムを作り上げた事例は、文化芸術と教育連携の好事例と言える。

その他の計画掲載事業の「美術館と福祉事業所との連携」では、福祉施設が製作過程を担ったアップサイクルバック(展示会の屋外幕をアップサイクルし作成したバック)の販売を新たに開始した。アップサイクルバックは展示会ごとに作成しており、販売開始後、売りきれることが多い商品となっている。

これらのことから、「(3)文化芸術と様々な関係分野との有機的な連携」は数値としては下回っている状況であるが、内容としては計画どおり推進できている状況と言える。教育・福祉の分野については、すでに様々な連携が取られている取組が多いが、文化芸術の力を社会の中で生かすためには、さらに多様な主体との連携を進めていく必要がある。

■施策Ⅳ〈つかう・いかす〉文化芸術活動を支える基盤整備 【主な取組 6 事業】

(1) 施設環境整備による安全性・利便性の向上

文化芸術活動の場としての利用を促進するため、利用者ニーズや時代の変化に応じた修繕や改修を行うことで、利用者の安全性や快適性の向上を図る。

主な取組		指標 1 (成果を数値で測る指標)					指標 2 (成果の評価に用いることができる状態等)		所管課
NO.	内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりに推移を示す				実績	
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度		
31	文化ゾーン整備事業	2023年12月末までに文化ゾーン内のサイン設置完了	—	サイン計画の作成	・歩行者サイン整備完了(28か所) ・車両サイン整備完了(16か所)			文化ゾーンを面的に魅力あるエリアにするため、博物館への車両進入路(市道神田2号線)に石畳風の景観舗装を施したほか、枝下用水周辺の景観向上策(景観配慮型の転落防止柵、用水路の化粧パネル等)にも着手した。また、来訪者の利便性を向上するため、博物館と美術館の駐車場の混雑状況をリアルタイムで発信する仕組みも整備した。	文化振興課
32	コンサートホール・能楽堂大規模修繕の準備	適切な大規模修繕のための設計完了	—	基本設計完了	実施設計完了			豊田市コンサートホールが誇るパイプオルガンについても、音質を維持する適切なオーバーホール等を行うため、オルガンビルダーによる実施体制を構築し、準備を進めた。	文化振興課

【総括】
 「文化ゾーン基本構想」及び「豊田市文化ゾーンにおける文化創造拠点及び歴史継承拠点の整備方針」の下、豊田市博物館が令和6年4月にオープンした。オープンに向けては、来訪者の快適な交通アクセスのために必要な案内サインや駐車場システムの整備を完了した。文化ゾーンは博物館、美術館、市民文化会館といった文化施設が集積し、緑と水の豊かな自然環境を有する豊田市を代表する魅力的なエリアであることから、今後は引き続き、魅力向上のために緑地整備等の取組を推進していく必要がある。
 コン서트ホール・能楽堂についても、豊田市の文化を象徴し、魅力を市内外に発信する施設であるため、安全性、利便性に加え、パイプオルガンの音質を適切に保持し、市民が誇れる施設であり続けられるよう、適正な管理に努めていく必要がある。

(2) 文化芸術活動拠点としての情報発信

公演・催事、ワークショップ等の文化芸術に関する市内外の情報を収集し、効果的に情報発信する仕組みをつくり、市民の文化芸術活動を支援する。

主な取組		指標 1 (成果を数値で測る指標)					指標 2 (成果の評価に用いることができる状態等)		所管課
NO.	内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりに推移を示す				実績	
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度		
33	文化施設のメディア掲載(テレビ、新聞、雑誌、ウェブ等)	掲載数 (①テレビ、②新聞、③雑誌、④ウェブ) ※策定時に把握している数値が無い場合設定なし	↑	①30件 ②219件 ③170件 ④157件	① 59 件 ② 244 件 ③ 179 件 ④ 238 件			美術館「フランク・ロイド・ライト展」(2023.10.21-12.24)は、多くのメディアで取り上げられた。また、「第64期王位戦」(2023.7.7-7.8)が豊田市能楽堂で開催され、多くのメディアで取り上げられたことで、能楽堂のPRにつながった。	美術館 民芸館 文化振興課
34	とよたアートプログラム(TAP)マガジンによる文化情報発信	ウェブサイト閲覧数 14,451回 (2020年度)	↑	22,286 回	17,353 回			TAPの活動を広く知ってもらい、一緒に活動してくれる仲間を増やすため、ライター講座を初めて企画した。参加者のうち2名がTAPライターとして加わった。	文化振興課 (財団共催)
		市民ライター数 3人 (2020年度)	→	4 人	8 人				

【総括】
 メディア掲載については、どの媒体においても昨年度から微増もしくは大きく上回った。話題性のあるイベントや展覧会は必然的にメディア露出が多かった。特徴としては、どの施設においても、SNSを含むウェブ媒体での掲載が主流になってきていることが分かった。
 とよたアートプログラム(TAP)マガジンについては、かかわる人材を順調に増やすことができた。しかし、記事作成数は昨年度を下回り、それに伴い発信数、閲覧数を減らしてしまった。過去には、TAPマガジンの取材がきっかけとなり、作家同士の交流やアートイベントへの展示につながった好事例もあったことから、文化芸術のつながり創出に寄与している事業ではあるものの、発信力については今後強化していく必要がある。

(3) 施設職員の専門性強化

専門性をもった外部組織などと交流や連携を深め、施設スタッフの専門性を強化するとともに、コーディネート力の向上を図る。

主な取組		指標1（成果を数値で測る指標）				指標2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課	
NO.	内容	策定時 (把握年度)	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりの推移を示す					
				2022年度	2023年度	2024年度	2025年度		実績
35	民芸館・民芸の森の運営を担う 人材育成事業	—	—	—	—	—	—	5月の「初夏、森の手ざわり」、10月の「観月会」という地域住民の交流や憩いの場となるイベントを市民活動団体と共働で実施した。	民芸館
36	施設職員の事業企画力・コーデ ィネート力の向上	—	—	—	—	—	—	劇場職員セミナーや愛公文セミナーなど、他地域の施設職員と合同で行うセミナーに参加することで、スキルアップだけでなく、職員同士の情報交換を行い有益であった。そのほか市民文化会館では、「高所作業研修」のほか、「ステージラボ」や「アートマネジメント」といった実践的な研修に参加しスキルアップを図った。	文化振興財団

【総括】

市民文化会館のオープンスペース「つながりリビング」では、2023年度には年間185回ものイベントを開催することができた。施設職員が企画したもののほか、市民や併設するカフェが提案した企画をうまく織り交ぜながら連携し、様々な企画を実践することで施設の魅力向上に務めた。事業企画力・コーディネート力の向上については、利用者から職員対応や事業内容が良いとお褒めの言葉をいただくことがあり、OJTを含めた研修の成果と言える。一方で、全体として経験の浅い職員が増えているため、今後も多数ある研修の中から特に時流や市民ニーズを捉えた施設マネジメント・企画・コーディネートの力量向上に資するものを積極的に受講し施設職員の専門性強化に努める必要がある。